

CITY X UNIVERSITY



大阪市立大学広報誌

Vol.14

march ● 2014

Vol.14
CONTENTS

●P1 特集 座談会

グローバル人材を どう育てるか 国際力強化の取り組み

●P5 OCU キャンパス紹介

新しい大学の顔! 魅力あふれるキャンパスへ

新理系学舎A棟・B棟
けやき通り
学術情報総合センター屋上庭園

●P7 OCU NEWS BOX

大畑建治教授がより簡便化された脳腫瘍手術の手法を確立
高田洋吾准教授が橋梁検査ロボット「バイリム (BIREM)」を開発

●P8 @ Campus [アットキャンパス]

日本拳法部が13連覇を達成
ボート部が第3位に入賞
医学部競技スキー部が優勝
学生の受賞情報 ほか

●P9 大学トピックス

第12回ホームカミングデー、中国・上海ホームカミングデーを開催
女性研究者支援室キックオフシンポジウムを開催 ほか

●P10 卒業生紹介

松井 みさきさん / 写真家

●裏表紙 OCUインフォメーション

医学部附属病院 先端予防医療部附属クリニック
「MedCity21」がオープン ほか

公立大学法人
大阪市立大学
OSAKA CITY UNIVERSITY

グローバル人材を どう育てるか

座談会出席者

国際力強化の取り組み

本学は第二期中期計画における重点戦略の1つに「国際力の強化」を掲げています。同時に、グローバル人材の育成は社会から大学が強く求められていることの1つです。

この座談会では、桐山副学長の司会のもと、国際化推進本部の推進本部長でもある西澤良記学長とともに、国際センターの所長で本学の国際化に取り組む中川教授、全学共通教育で新たにグローバル・コミュニケーションコースを立ち上げた渡邊准教授にご参加いただき、本学の特色を踏まえた「グローバル人材とは」、「国際力強化」についてお話しいただきました。



にしざわ よしき
西澤 良記
大阪市立大学 理事長・学長



きりやま たかのぶ
桐山 孝信
大阪市立大学 理事・副学長



なかがわ しん
中川 眞
国際センター所長・文学研究科教授



わたなべ よりこ
渡邊 席子
大学教育研究センター准教授

重点戦略としての国際力の強化

桐山 昨今『グローバル人材』という言葉が、新聞・テレビ等で聞かない日はありません。文科省でも大学のグローバル化について議論されています。そういう中で、今年、西澤学長も年頭挨拶の中で、本学の第二期中期目標期間の重点戦略の一つである『国際力の強化』に言及されました。そこで、まずは、学長の方から本学における国際力強化、あるいはグローバル人材についてお話を聞きたいです。

西澤 今年は、第二期中期目標・中期計画の3年目に入ります。中期目標6年を2年間の区切りで考えると、最初の2年間の企画・準備期間が終わり、今年、来年は、いよいよ展開・実行の期間ということになります。残りの2年は、それをまとめて次の目標に向かってどう展開するかを計画するという、大きい流れがあると思います。

その大きな流れの中で、三つの重点戦略があります。一つ目は都市科学でシンクタンク機能を強化するという。二つ目は高度専門人材の育成。三つ目が国際力の強化。三つとも全部、共通して人材育成ということがベースにあって、それにどう取り組んでいくかを重点戦

略としています。

この中で特に今回の座談会のテーマである『国際力の強化』を挙げているのは、本学が公立大学であること、さらに都市・大阪を基盤とした大学であること、大学の設立の理念が『実学』を旨としていることを背景に、世界に通じる実学を担う国際的な教育・研究機関であることが本学に求められていると思うからです。**文系、理系の枠を超えて都市の課題を研究することでシンクタンクの機能を果たすことができる本学だからこそ、有為な人材を社会に送り出していくこともできる、そのための国際的な知的インフラ、知的拠点になることが、本学の使命だと考えています。**

昨今、いろんな場面でグローバルという言葉が使われていますが、この国際力を高めるというベースで最初に挙げているのは、明快に言う「学生の英語力をまず高める」ことです。別に英語力を高めたから国際力が即、高まるとは思っていませんが、入口として、英語力というのがまず基盤の教育として必要であると考えています。その上で、次に文化であるとか、いろんな人とのコミュニケーションとか、ネットワークとかそういう展開ができます。だからこそ、これはベースに(英語力は)必要だろう

と思っています。

これはもう、現在、日本の社会を考えても、例えば会社に入っても、我が国だけで何かができるというような状況はほとんどない、と考えた方がいいと思います。そして、そのことを学生諸君が認識して、大学の中でまずはじめに勉学に励んでいくというのが非常に重要だと考えています。そういう意味で、グローバルという言葉が強調されているのだと思いますし、私たちもそこはきっちり、学生にそういったものを与えなければならない、あるいはそういう制度、システムを構築しなければならないと考えています。

今日の座談会も、そのあたりを中心に話していければと思っています。

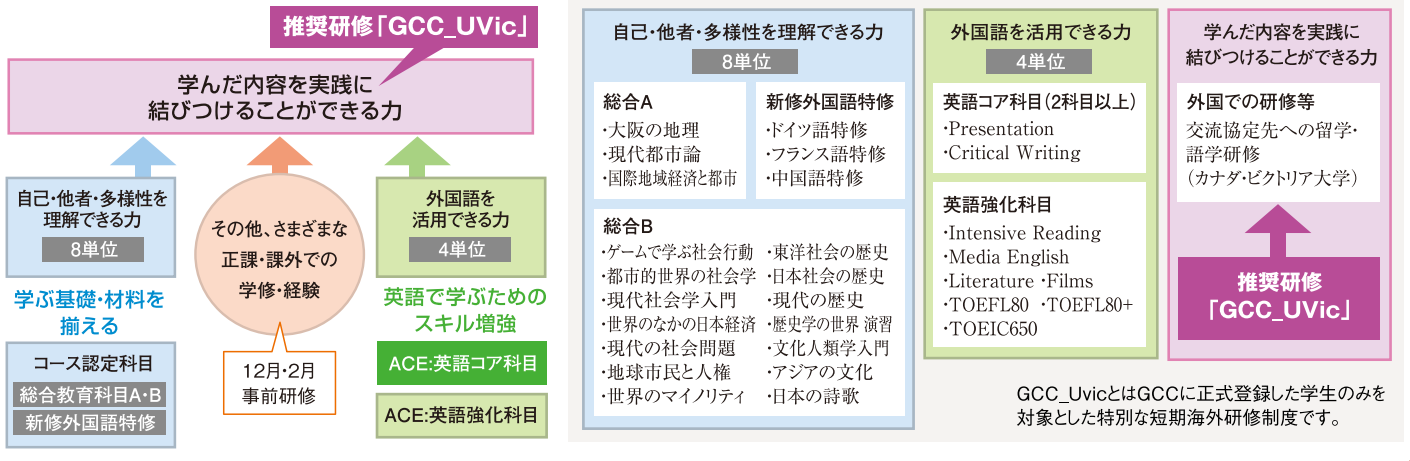
留学生たちとのイベントを企画、国際センターの設置

桐山 2011年7月に発足した国際センター、当初からセンター長をしていただいている中川先生、これまでの国際センターでの取り組み、今後の展開についてお話を聞きたいです。

中川 本学にとって非常に意味があったのは、まず、国際センターを設置したことですね。ちょうど三年前になるわけですけど、それまでは全学的に統括するセッションがなかった。ということで

GCC(グローバル・コミュニケーションコース)の概要

コース認定科目(平成26年度)



非常に大きな意味があった。例えば短期の語学研修で言えば、従来は部局でやっていたことを大学全体で取り組むようにしました。オックスフォード、シェフィールド、ビクトリア大学など、これによって非常に研修に行く学生が増えました。

それから、海外インターンシップ。これは同窓生、卒業生と連携しながら、学生たちに海外でインターンシップの経験をしてもらう。これは上海で始めました。それから、今年からスタートになりますが、ダブル・ディグリーですね。これはまだ公式ではないのですが、工学研究科の都市系、インドネシアのガジャ・マダ大学とダブル・ディグリーの制度を研究しており、協定を結ぶことになるかと思っています。これを突破口として、ダブル・ディグリーをもっと進めていきたい。それから留学生、海外からの受け入れの方も少し進展しています。さらに優秀な留学生を取り込むために、海外の政府機関とのコネクションを大学として積極的に作っていきたくて考えています。それと平行して非漢字圏からの短期留学研修。具体的にはウィーバー州立大学の学生を受け入れて、今年も実施する予定です。ネイティブの方に日本語を学んでもらうため、本学で語学研修を提供していると考えています。

学生生活と関係するところでは、OGM(オオサカシティ ユニバーシティ グローバル メンバーズ)を作りました。これは本学の日本人の学生を中心に、留学生たちと一緒にいろんなイベントをしたり、交流を重ねていくことを企画、実施する組織、いわゆる国際センターのサポーター・スタッフです。ゆくゆくはこれを発展させて、学内のイングリッシュ・カフェとも合流させたグローバル・ヴィレッジというものを作りたい。

それから同窓会組織ですね、やはり国際絡みでは充実させないといけない。同窓会の方々と一緒になって、国際的な同窓会を充実させようとしています。上海には、上海友好会という同窓会

組織があり、まずはその活動を支援していくことから始めました。

グローバル・コミュニケーションコースの概要

桐山 学生のグローバル人材の育成ということでは、2013年度から新入生を対象にしてグローバル・コミュニケーションコースが開設されました。その中で、中心になっていただいている渡邊先生にお話ししたいと思っています。

渡邊 グローバル・コミュニケーションコース(GCC)は、大学に入学してからできるだけ早い時期に「自己・他者・多様性を理解できる力」と「外国語(主に英語)を活用できる力」を培って、そして、「学んだ内容を実践に結びつけることができる力」を発揮する場として海外研修(必須)に出させていただこう、という狙いでデザインされています。日本から出て、知らない環境に行って、いろんなことをあらためて考えて行動して、ひとまわり大きくなってほしい、というコースです。

コースにトライしたい人には、1年目の前期のうちから、コース認定科目の全学共通科目や外国語科目(上図「GCCの概要」を参照)を受講して、海外研修に出るための素地づくり、できるだけ広い分野に関心をもって主体的に学んだり、英語の運用能力(読む、書く、聴く、話す)をバランスよく高めていただきたいと思います。コースの募集人数は最大40名です。もし正式登録希望者が40名を超えたときは、各種語学力テストのスコアを目安に選考しますので、入学後も自立的に英語を学んでいただきたいと思います。

正式登録完了後、このコースの目玉であるGCC_UVic(カナダ・ビクトリア大学のGCC専用海外研修)への参加を目指して、さらに学習を進めていただきます。GCC_UVicは、このコースに正式登録した人のみが参加できるスペシャルな研修です。参加できる人数は最大20名まで、次

の年の3月の春休みに実施されます。3月の時点でそれなりに英語ができる、たとえばTOEICならトータル650点程度、そのうち、リスニング350点程度のスコアを持っている状態で行かなければ厳しい。言い換えると、それなりに英語ができる状態で行って学べば、得るものがとても大きい研修です。

GCC_UVicのスペシャルな点は、大きく二つあります。一つ目は、GCC_UVicがこのコースのためにデザインされたティーチャーメイドの海外研修だということ。どこがティーチャーメイドなのかというと、通常の英語圏への海外研修では、英語「を」学ぶことが中心となるのに対して、GCC_UVicは英語「で」学ぶためのアクティビティをたくさん取り入れているところです。午前は教室で英語「を」学んで、午後はカナダの街に出たり、カナダの人々と交流したり、カナダの自然や文化、スポーツ、社会にじかに触れて、英語「で」学びます。そして二つ目は、金銭的にお得なこと。GCC_UVicに参加する人には、大学から1920カナダドル(約20万円)の支援が出ます。言い換えると、この人なら1920カナダドルを支援してもよい、と大学側が期待・判断できるだけの力と意欲があって、そして、実際にカナダに行って確かな成果をつかんで帰ってきてくれる人に行ってもらいたい、ということでもあります。

グローバル・コミュニケーションコースは、自分で学ぶ力と学ぶ余力のある人に、もっと先を目標として成長してもらうためのコースです。そして何より主専攻あつてのコースですから、入学した学部・学科でしっかり学んでいただくことが大前提です。その上で、能力・余力・意欲のある方にはぜひ、コースを介してプラスαの付加価値をつけていただきたいと思います。コースの正式登録者募集は7月です。詳細については、チラシを配布したり、全学ポータルサイトでも告知します。トライしてみたいと思った人には、まずは応募す

るところから始めてみてほしいですね。

桐山 このコースの修了については、二年生の終わりぐらいまでに修了要件を満たして修了書を発行し、例えば就職活動などでもそれが活用できるといいかなと思います。

西澤 英語に限らず、語学というのは使えなければ話にならないですね。大学の一つの考え方として、英語を学ぶということは、まず実用的であることも必要条件の一つだと考えます。グローバルということの本質でいえばステップのワンカツーくらいにしかならない、ただそれはすごく大事なことで、今までの教育はそれがなかった。学習としての英語はみんな分かるのですが、それが“使える”ということになっていなかった。だから、私はそれはすごく大事だと思っています。私の年代では、世界を相手に仕事をする際に、語学で大変な苦労をされている人が多かった。ぜひ、本学でも英語については、もっといろんな仕掛けを作ってもらいたいと思います。それと、大学に入った限りは、ある程度英語は強制的に勉強をさせるべきだと思っています。一回生で基本的な部分はきちんと身につけさせてあげたいと思う。もちろん、能力のある人はそれを飛び越えてやっとならいいし、そういうチャンスはいくらでも作ってあげたい。ただ、本学に入ってきた以上、全体としてある一定のところまでは英語を身につけさせてあげたい。それは大学を出てから、必ずみなさんの将来の役に立つはずだと思います。だからある程度は強制的に、そして基礎を固めた上で、さらにアドバンシングで多様性のあるコースを作っていくというのはすごく大切なことだと思います。

己を知り、鍛えることが グローバル人材の第一歩

桐山 すでに本題の方に入ってきてますが、本学にとってのグローバル人材の育成の方向、そもそもグローバル人材というのは、どう考えたらいいのか。どんな人材を育てようとしているのかについて、ざっくばらんにお話しいただけたらと思います。さきほど中川先生からいろいろな取り組みをしてきたという話がありましたが、その中で先生がお考えになっているグローバル人材についてお話しいただけますか。

中川 ちょっと逆説的ですけど、ローカルに貢献できるグローバル人材を育てたいと考えています。これがとても大切だと。グローバル人材だからといって何も海外で活躍する必要はなくて、この大阪でグローバルに活躍できる人材のことを考えるのが、本学の人材育成としてはちょっとおもしろいし、本来のあるべき姿ではないかと思っています。

大阪市立大学そのものが地域貢献の大きな柱を建てている。ここで学んだ人は、本当に地域に貢献できる、そういう人を育てるべきだと私は思っていて、グローバルな視点を持ちながら、ローカルとグローバルが交差する人になってほしい。だから地域貢献をやりたい人は、グローバルなことを学んだ上で地域でがんばってほしい。そして地域のことをいっぱい学んだ人が、逆に外に行つてグローバルに活躍してくるというように、クロスする感じですね。そういうような人材が育ってほしいと思います。

桐山 キャッチフレーズのいうと？

中川 これはですね、世界あるいは、地球上のどこにいても生き延びることができる。且つ人のために働くことができる「ケモノの人間力」を持った人。そういうたくましい人間に育ってほしいと思っています。ケダモノではなくて“ケモノ”です。

つまりそれは、机上の空論を語るのではなくて、本当に瞬時に身体が動く人。大袈裟に言えば、近代主義みたいなものが人間をがんにじめにして、動物的な勘だとか、感性だとかを失わせていった。そういうものを取り戻し、基礎の力にして、他者に対する想像力とか思いやりをもって、他の人や社会のために働く。しかし、少なくとも自分自身は、一人で生き延びていける人でなければいけない。そのようなことを念頭にいろいろな施策というか、インフラ整備をしていきたいと思っています。

西澤 グローバル人材って、一番の基本になるのは、まず己を知って、己を鍛えないとダメなんです。まず、そこが基本です。その上で、他者を知る努力をして、他者をよく理解すること。その次に、多様性を寛容できるということ。そういう段階を順番に踏んでいくことが基本だと思いますよ、生きていくための。それをより明確にして、地球全体ということでグローバルという話になってくると、必ず言語というのは必須条件で

す。その上に文化とか、慣習とかいろんなものが加わってくるんですね。

ヨーロッパでは、四カ国語しゃべる人なんてざらにいます。だからといって他者を理解できているかという別です。手段としては彼らはものすごく強いものを持ってます。逆に、日本人というのは、考え方から言うとグローバルな面において、高い民族性を持っていると言えると思います。まず宗教にあまり影響されない。これは、ものすごく大きい。それと、人柄というか民族の特性が、非常にマイルドで繊細な部分を持っているけれども、教育レベルは高い。だから日本人はグローバルな民族かなというふうに思うわけです。

積極性の弱さがよく言われていることなんですが、それだって人によって全然違います。だからこそ、日本人として、若い人たちに起爆剤になってほしい。語学を一つ踏み越えるだけでも、随分と違う。それでまずは英語です。

桐山 学長はしばしば留学生や、研修から帰ってきた日本人の学生とも対談されていますが、印象に残ったことをお聞かせいただけますか。

西澤 やっぱ、目の色が変わるんですよ、思い切つて海外に行く経験を積むと、いっぺんに実力がついてきますね。帰ってきた人はたとえ二週間でも一ヶ月でも実りを感じてますよね、間違いなく。話ができるということから踏み込めるか、踏み込めないかは大きいんですけどね。それをはじめに大学の中での教育でできるようにしてあげるとというのが、僕らの役目かなと。

海外を旅することで 見えてくるもの

桐山 今のことからわかるように、グローバル人材は人間としての基本的なところの話に通じていますね。それが中川先生が言われるようなローカルからはじまるか、グローバルから進んで





上海就業体験



マレーシア工科大学生のゆかた着付け体験



ウィーバー州立大学生との交流会

いくかというような形、違いになってくるのかなと、それが本学の特徴。

中川 このグローバル・コミュニケーションコースの今年度の正式登録者は限られた30名じゃないですか。入学生が約1500人いる中の30名。学長の話を聞いていると、とにかくもっとたくさん海外に行かせる、行ってもらうというような仕組みも作った方がいいような気がしますね。別に語学力はどうだっていいから、とりあえず行ってこいよ。僕はどちらかというそっちの立場です。それで英語ができなかったら「絶対に英語が必要だな」って実感してわかるみたいなね。そういう体験も必要でしょう。ただ、このベーシックの部分、そこをどうするかが大学としては大事だと思います。

西澤 大事です。

桐山 今、いろんな海外研修・語学研修などに年間約200名くらい行ってるんです。それを例えば500名くらいにすると話も出ています。

中川 そうですね。数の目標というのは具体的にあったほうがいいように思いますね。

西澤 僕はもうちょっと言っているんですよ。例えば一回生の一限目の授業を全部、英語にして必須にする、みんなもっと勉強しなさいと。一年間はね。その時に、いろんなツアー、あるいはイベントみたいなことを企画してそこに自由に参加しなさいと。そういうものがあって且ついろんなイベント的なものを募集して、本人が手を挙げて、あるいは手を挙げなくても、ある程度はやらせていくとかたちを作りたいんですよ。そしたら1500人全員がね、何らかのかたちでそういうことに恩恵を受けながら卒業できるんじゃないかと。

中川 例えば商学部とか経済学部のある先生方は、ゼミで必ず学生を海外に連れて行ってるんですね。そういうのはとってもおもしろいし、意味がある。そういうことをもっと組織的にできるようになったらいいのでは。今は個人の先生の意欲に頼っていますが、一つの仕組みとか組織、制度化までいなくても、カリキュラムの中にきちんと位置づけてやるのが大事。

西澤 いいですね。

中川 そうなると、渡邊さんの専門領域のディプロマポリシーとかアドミッションポリシーあるいはカリキュラムポリシーとかを変えていくというか、明確に打ち出す必要がありますね。

西澤 もっと言うと、入学の段階でそういう方向性を明確にすることが大事です。本学に来たら「英語、絶対に必要です」ということを。

中川 海外へ行くのが義務ですよ、という方針の大学もあるし、そういう所はやっぱり学生もその前提で入学するじゃないですか。総合大学でそれができたら、日本で最先端になる。今、単科系の大学ではそういうことができるけど、総合大学ではなかなかない。

西澤 全学一致で同じことをする必要はないんです。学部ごとに特徴やグレードがいろいろあっていいと思います。平成26年度からは「はばたけ夢基金」を活用した海外留学生に対する奨学金制度を試行的に始める予定です。そういうことも、学生の海外留学の後押しになればと思います。

桐山 かなり話が進んできましたけど、いかがでしょうか。グローバル人材を育成する取り組みを増やすということについて。

中川 学長が今おっしゃった日常的に英語をどうするかということ言えば、英語の授業の比率がまだ少ないので、もっと上げたほうがいいと思っています。それから、英語だけで修了できるコースを作りたいとも考えています。これで非漢字圏からの留学生の勉学のハードルがかなり低くなりますよ。それから、外国人教員の比率を高める。特に外国人専任教員の数を二倍にする。これは、数字として挙げておきたい。その上で、留学しやすくなるよう単位互換を制度化して、ジョイント・ディグリーを中心とした修学制度を作る。自分で大学を選んで、それを後から大学が認定して、ちゃんと留学しましたよということで留年しないような制度もね。

海外拠点を海外に行くためだけに作るのではなく、本学の中に海外の大学の拠点を設けたいと思っています。海外オフィスをうちの大学に置きませんかという話で、アジア、オーストラリ

ア、東南アジアの大学から二つ、ヨーロッパから一つ、北アメリカから一つ、本学の中に海外の拠点を置いていただき、ゆくゆくは海外のサテライトとか、海外キャンパスにつなげていければと思っています。

本学卒業生の開高健の座右の銘に、ゲーテの言葉を引いて「若き日に旅をせずば 老いての日に何をか語る」。若いうちに旅をしないと、老いてから語ることはない、ということですね。若き日のいろんな体験を肥やしにしないと、それを語ったり人と話したりすることができなかった。開高健はこれを座右の銘にして世界中を歩き回った。しかし、自分が歩きはじめたのは少し遅かった。ぜひ、「若いうちに海外に旅をせよ」ということを、開高健はしきりに言ってるんですね。これは卒業生から現役の学生に送る言葉ではないかと思っています。

つまり、日常の定点から自分を外して異物と衝突し、ヤスリにかけられるように人と物事を観察し、観察される。旅に出ると、鮮やかな不安を知覚できる。それは自分への目覚めの不安でもある。こういう卒業生の言葉っていうのは深いメッセージですよ。

西澤 それ、大事ですよ。ほんとうに。その通りだと思います。グローバルの出発点ですよ。今回グローバルということで話しましたが、大学を出て、社会人となってはじめてこういうことが必要だったと言われる中で一番多いのが、やっぱり英語をきちんとやっていたらよかったということです。少し前の日経新聞の「わたくしの履歴」で小澤征爾がつくづく言っているんですね。私は公式パーティーに一切、出ない。なぜか、英語がしゃべれないから。彼ですらそうなんですよ。音楽は万国共通で通じる。だからオーケストラで使う音楽用語は全部イタリア語なんですよ。ね。「アレグロ!」。それで通じるんですよ。だから、できたと。しかしそれでは、あれくらいのグレードの人だと物足りないのではないかと、読んでてそう感じました。だからこそ、ツールである英語で苦勞してほしくない、それが障害になって海外を体験することを躊躇してほしくないと思います。

桐山 ありがとうございます。

新しい大学の顔! 魅力あふれるキャンパスへ



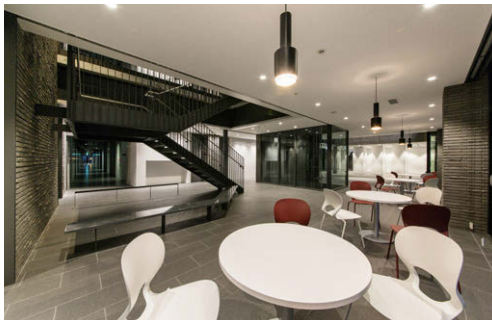
新理系学舎 A棟・B棟

杉本キャンパスに新しい大学の顔となる
新理系学舎(A棟・B棟)が
平成26年1月31日に完成!

B棟は吹き抜けのエントランスホールや展示スペース、さらに各階にリフレッシュスペースを備えており、これまでにない魅力あふれる学舎となっています。外観デザインも水平線を強調した既存棟のデザインを踏襲しつつ、ガラスを多用した開放的なものになっています。



新理系学舎の外観。夜間には灯りが漏れ、ファサードに彩りを添えます。



研究や授業の合間にリフレッシュのできるスペースを各階に設け、特に1階は屋外のテラスと一体で利用できるようになっています。



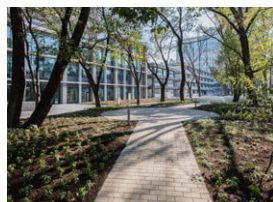
エントランスホールは3層吹き抜けの空間。南部陽一郎先生の「対称性の自発的破れ」をモチーフにしたデザインの壁やポスターセッションのできる展示スペースを備えています。



- A棟：鉄筋コンクリート造 地上3階 地下1階 搭屋1階／延床面積 3,232.27㎡
- B棟：鉄筋コンクリート造 地上3階／延床面積 1,657.27㎡



大学北口



木立の小径



オープンテラス



クロスロード



各所にベンチを設置



通りの中央にある憩いの広場



半円形ベンチ



けやき通り

JR杉本町東口から
南部ストリートとつながる
大学のメインロード、「けやき通り」が
平成26年2月24日にオープン!

理工地区を南北に貫くけやきの並木と両側の通路がリ
ニューアルされ、緑を感じ、楽しく歩き、集える「けやき通り」
として生まれ変わりました。

既存の樹木をできる限り活かし、土盛りをし、高低差のある
微地形を作り出した並木の部分は、広場や小径を設けること
により、木立の中に入って緑を感じられる空間となっていま
す。中央の広場には、多くの人が集い憩えるようにベンチを
多数配置しました。

また、通路部分からは車両を排除し、安心して歩ける道と
なっており、向かい合う学部 of 玄関をつなぐクロスロードが
設けられています。

夜間には、緑地や木立を照らす照明や、クロスロードやベン
チに仕込まれたフットライト等により、昼とは違った魅力的な
顔を見せます。

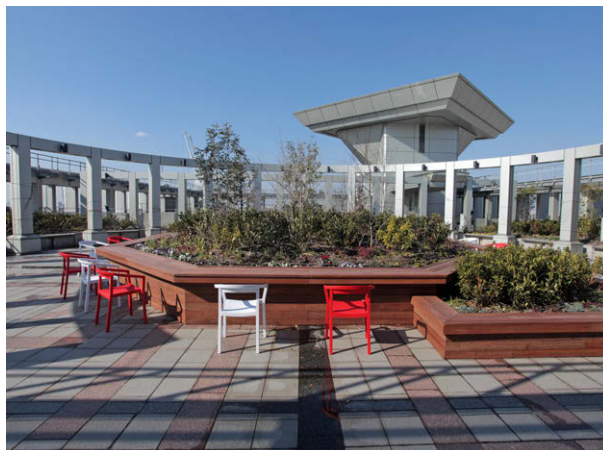
光と風と緑の香りを感じる庭園に!

～学術情報総合センターの屋上庭園がリニューアル～

平成26年4月3日(木)にリニューアルオープン
する屋上庭園には、テーブル型の大きな花壇と
色鮮やかなスペイン製の椅子があります。座つ
て本を読んだり、空を眺めたりと、思い思いに
ゆったりとした時間を過ごすことができます。

●利用時間：平日・閉館日の10:30～15:00
(土・日・祝日および年末年始は休み)

●問い合わせ先：学術情報総合センター運営課
庶務担当 TEL：06-6605-3211



1 摘出困難な脳腫瘍に対して、より簡便な手術方法を確立

医学研究科 脳神経外科学の大畑建治教授等のグループは、脳深部に発生する良性脳腫瘍に対する高難度な手術方法をより簡便化するための手法を確立しました。

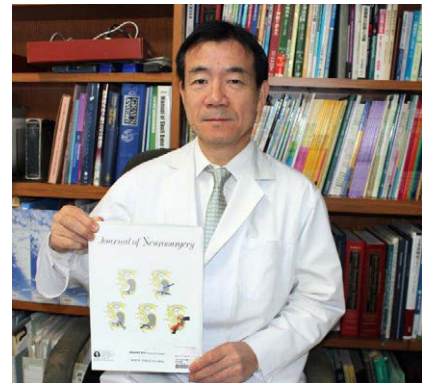
頭蓋咽頭腫といわれる脳腫瘍は、視神経や脳深部の重要な血管を巻き込みながら発育する特徴があり、脳腫瘍の中でも摘出が最も難しい腫瘍です。今回確立された方法は、頭蓋咽頭腫の中でもさ

らに切除が難しい、大きくて複雑な形状の頭蓋咽頭腫に対する手術方法で、耳の後ろの骨（錐体骨）を削除して切除する方法（経錐体法）です。この方法は難易度が極めて高いため開発者である大阪市立大学以外では、ハーバード大学でしか行われていませんでした。今回、30年にわたる経験をもとに、経錐体法を簡便化することに成功し、10年間で再発のない生存率86.5%の好成績をおさめることができた

ました。その結果を研究論文として発表することにより、この手術手法が国内外で普及し、多くの患者さんが救われることを目指します。

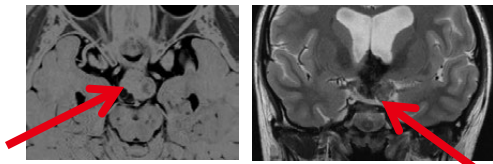
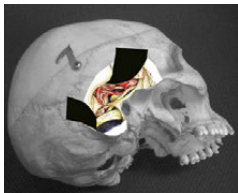
本研究の成果は、「Journal of Neurosurgery」の電子版に論文が掲載されました。

経錐体法では頭蓋後外側の頭蓋骨を開けて、錐体骨を削除し、ヘラ（黒）を脳にかけながら、覗き上げるようにして到達する（上図）。MRI画像で示すと、正中病変に斜め後方から（下段左）から覗き上げる（下段右図）経路となる。



医学研究科 大畑建治教授

経錐体法



大畑教授のコメント

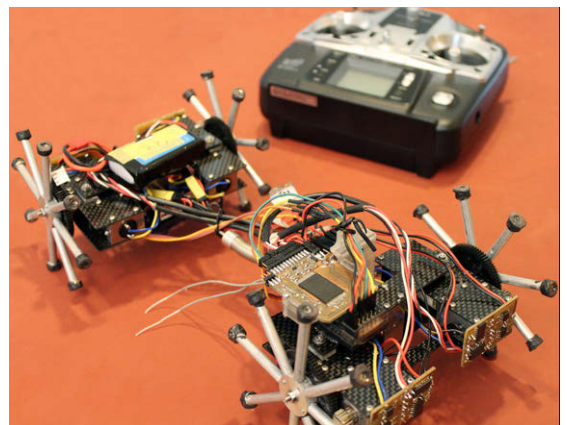
手術は登山に似て最後の一步まで気を緩めることはできません。エベレスト登山のような高難度手術には、最高の科学技術が求められ、培われ、そして普遍化されます。今後、この方法が普及し、多くの患者さんが救われることを期待しています。

2 橋の鋼鉄部材を検査できる 橋梁検査ロボット「バイリム (BIREM)」の開発

工学研究科の高田洋吾准教授等は、立体的な構造を有する鋼橋各箇所を自由に移動でき、目視検査が可能な橋梁検査ロボットの研究開発を行いました。

運動解析や性能測定実験を行った結果、全長34センチ、幅16センチ、約660グラムのロボットが、本体と同程度の重りをぶら下げても安定した上昇移動が可能となり、橋梁点検で必要になる水平部と垂直部や段差、凹凸を有する路面走行に関しても、その走破能力を確認しました。橋梁検査ロボット・バイリム（BIREM：Bridge Inspection Robot Equipping Magnetsの略）は、将来的に点検費用を抑えることが最大の目的として、プロジェクトが立ち上がった2010年4月から橋梁を検査するロボットについての実現を試み、ヘビ型、クローラ型、車両型、歩行型

工学研究科の高田洋吾准教授（左）と前期博士課程1年生 榎木幹司さん（右）。



橋梁検査ロボット・バイリム 試作2号機

など様々な形態の移動機構について構想を検討していった結果、バイリム開発に至るまで、22カ月を要しました。鋼鉄製構造物の検査用に用いるため、永久磁石が最適であると判断した上で、ヤドカリが木を登る様子の映像を開発のヒントとして、各車輪は設計されました。プレス発表後反響が大きく、『NHKワールドNEWSLINE』（国際放送）でも紹介されました。

高田准教授のコメント

今後、バイリムの複製機を作り、実用化に向けて現場適用していきます。また、コンクリート橋でも異常箇所を撮影して回る事ができる移動ロボットを研究開発したいと考えています。

**日本拳法部が全国国公立大学
日本拳法選手権大会で
男子13連覇、女子上位独占!**

平成25年9月29日(日)に第45回国立国公立大学日本拳法選手権大会が行われました。本大会は、国公立大学の日本一を決める大会であり、大阪市立大学は今回で13連覇を果たしました。男子団体戦で優勝、女子個人戦では1~3位までを独占する結果となりました。日本拳法部を指導するOBをはじめ、クラブ関係者の喜びもひとしおでした。



**ボート部が
関西学生秋季選手権大会
男子エイトで第3位に入賞!**



平成25年11月1日(金)~3日(日)に、関西学生秋季選手権大会が行われました。(参加校数32校・参加者数482名)花形種目である男子エイトにて、京都大学などの強豪校と熱いレースを繰り広げ、第3位に入賞、4年ぶりにメダルを獲得しました。

**医学部競技スキー部が
第22回関西医学部対抗
スキー選手権大会で優勝!**

平成26年1月1日(水)~3日(金)に、第22回関西医学部対抗スキー選手権大会が行われました。関西の主な9つの国公立大学の医学部スキー部が集い競う伝統ある大会で、84名の選手が出場する男子SL(回転)で優勝、男子GS(大回転)で2位、SL・GSの総合タイムを1回生で競う男子新人の部で優勝、2日間通して各大学の獲得ポイントを競う総合の部で6位入賞を果たしました。



学生の受賞情報

平成25年9月28日(土)
**日本宇宙生物科学会
第27回大会で
優秀発表賞を受賞**

生物部が、宇宙航空研究開発機構(JAXA)実施の教育プログラム「アジアの種子2013」宇宙実験の実験協力者として作業を行ってきた成果を日本宇宙生物科学会第27回大会において発表し、優秀発表賞を受賞しました。

平成25年10月8日(火)
**日本沿岸域学会
「研究討論会2013」で
優秀講演賞を受賞**

工学研究科都市系専攻前期博士課程2回生の板谷天馬さんが日本沿岸域学会「研究討論会2013」で優秀講演賞を受賞しました。

平成25年12月8日(日)
**土木デザイン設計競技 景観開花。(2013年)で
東京建設コンサルタント賞、
第四回アーバンデザイン甲子園(2013年)で最優秀賞を受賞**

工学研究科都市系専攻 後期博士課程1回生の阿久井康平さん、前期博士課程2回生の中井翔太さん、塩原裕樹さん、前期博士課程1回生の植平健さん、工学部都市学科4回生の諏訪淑也さん、西尾広也さん、高橋大吾さんが、「土木デザイン設計競技 景観開花。(2013年)」にて東京建設コンサルタント賞を、(社)日本建築学会近畿支部都市計画部会主催「第四回アーバンデザイン甲子園」(2013年)にて最優秀賞を受賞しました。

平成25年12月12日(木)
OSAKA LOVERS CMコンテスト2013で準大賞を受賞



12月12日(木)にOSAKA LOVERS CMコンテスト2013の表彰式が開催され、工学部化学バイオ工学科の4回生 肖文沁(しょうぶんしん)さん、大下勝弘さん、中道真人さんらのグループが準大賞を受賞しました。

平成26年1月7日(火)
住吉区役所から表彰

環境保護・国際協力ボランティアサークル CH OVORA(チョボラ)のメンバーがボランティア部門で、生活科学部4回生の原田亮さんが芸術文化部門(個人の部)で表彰されました。なお、原田さんがデザインされたステッカーは住吉区災害時地域協力事業所にて使用されます。



キャンドルナイトを開催「〜ワシントン広場って知っていますか?〜」

平成25年1月23日(木)~24日(金)の2日間、杉本キャンパス1号館前の「ワシントン広場」(杉本キャンパス内での愛称)でキャンドルナイトを開催しました。これは文学部のアーツマネジメント実習(「表現・表象文化

論演習II)」の一環として行ったもので、キャンドルのレイアウトには生活科学部の居住環境学科の学生が加わっています。また近くの保育園、幼稚園の児童とのコラボも行った、地域の人々との交流を深めました。



■ 第12回ホームカミングデー、上海ホームカミングデーを開催! ～卒業生との交流が活発に～

平成25年11月3日(日)に「みんなで創ろう 市大コミュニティ!」をスローガンに第12回ホームカミングデーを開催しました。当日は第37回大阪市立大学OTクラブ総会が開かれ、本学を退職された教員の方々と、学長をはじめ役員及び研究科長等が懇談のひとつを持ちました。また、同日の15時からは大阪市立大学支援協議会が開催され、大阪市立大学同窓会と教育後援会、大学の3者が、学生支援や大学支援、ステークホルダーとの連携強化を図るべく、それぞれのトップが一堂に会し、保護者交流の充実やOB・OGとの連携強化、ホームページやメールアドレス

を活用したネットワーク強化について熱心な意見交換を行いました。

11月7日(木)には中国・上海において、日中友好交流を記念した学術交流会、レセプション及び上海ホームカミングデーを大阪府立大学と共同で開催し、総勢110名余りの方にご参加いただきました。日中友好交流記念レセプションには、在上海日本国総領事館の小原雅博総領事をはじめ、上海市内の関係機関や大学から多数の方にご出席いただきました。引続いて行われた上海ホームカミングデーでは、本学国際交流アドバイ

ザーの花井健氏、大阪市立大学上海友好会の平松徹会長をはじめ、本学卒業生が多数ご参加くださり、出席卒業生の最年長者の原田利明氏の一本締めにより閉会となりました。今回のイベントを機に、今後も上海での同窓会活動や国際交流活動をさらに活性化していきたいと考えております。



上海ホームカミングデー

西澤学長の挨拶
(第12回ホームカミングデー/
杉本キャンパス)

■ 女性研究者支援室キックオフシンポジウムを開催! ～女性研究者が能力をより発揮できるように～

平成25年度科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業(一般型)」に採択されたことにより、女性研究者の積極採用、上位職への積極登用、女性研究者が最大限にその個性と能力を発揮できる環境整備をすべく、平成25年12月11日(水)に女性研究者支援室キックオフシンポジウムを開催しました。

独立行政法人科学技術振興機構・科学

技術システム改革事業プログラム主管の山村康子氏と大阪府立大学人間社会学研究科教授・女性研究者支援センター長の田間泰子氏にご講演いただき、新室長である金澤真理氏(法学研究科教授)からの挨拶、運営委員の大仁田義裕氏(理学研究科教授)から取り組みについて説明がありました。また、12月20日(金)には「第一回研究者交流会」を開催し、研究のプレゼンスをあげるこ

との重要性や、子育ての日常と緊急時の対応について外部より講師を迎えてご講演いただきました。



西澤学長の挨拶



熱心に話を聴く
参加者の皆さん

女性研究者支援室

TEL : 06-6605-3660

E-mail : ocu-support-f@ado.osaka-cu.ac.jp

第2回 学生国際交流会 ～本学学生と留学生との交流の輪～

平成25年12月18日(水)に第2回学生国際交流会が開催されました。この交流会は教育後援会との共催で毎年開催され、留学生と日本人学生の交流の場となっています。今年は過去最高となる約

180名が参加し、全員参加型の自己紹介ゲームや本学課外活動団体であるアカペラサークルAccord(アコール)の演奏を聞きながら談笑し、有意義な異文化交流の場となりました。



「就職に強い大学総合ランキング」公立大学1位にランクイン!

週刊ダイヤモンド(10月12日号)の「就職に強い大学総合ランキング」で全国の大学で7位、公立大学で1位にランクインしました。就職者の中で国家公務

員と地方公務員の就職率が高かったこと、また上場企業(グループ会社を含む)への就職者が多かったことが評価につながりました。

「就職に強い大学 総合ランキング」(「週刊ダイヤモンド」)

順位	区分	大学名	総合得点 (100点満点)	就職率 (40点満点)	上場企業就職率 (40点満点)	公務員就職率 (10点満点)	国家公務員就職率 (10点満点)
1	国	一橋大学	85.5	37.4	40.0	2.2	5.9
2	国	名古屋工業大学	83.1	35.0	40.0	4.5	3.6
3	私	東京薬科大学	81.7	39.3	40.0	2.4	0.0
4	国	お茶の水女子大学	81.6	27.7	36.7	7.2	10.0
5	国	東京大学	80.9	23.0	40.0	8.0	10.0
6	私	昭和薬科大学	80.9	40.0	40.0	0.9	0.0
7	公	大阪市立大学	78.5	27.7	33.0	7.7	10.0
8	私	京都薬科大学	78.4	39.7	35.9	2.8	0.0
9	国	東京外国語大学	77.6	29.0	40.0	3.2	5.4
10	私	東京理科大学	76.8	27.3	40.0	3.8	5.7

出展:「週刊ダイヤモンド」アンケートより。東京大学は東京大学新聞のデータも参照している。
※数値は同じでも、小数点2位以下によって順位が異なる。

今後の就職ガイダンス予定【新4回生対象】

- 開催場所:高原記念館
- 4月下旬…『フォローアップガイダンス』
- 5月中旬～6月上旬…『学内求人説明会』

大阪市立大学では、学生一人一人の「就職した後の成長」を見据えた就職支援を行っています。就職活動のノウハウを伝えるのではなく、卒業して社会に出た後に必要な考え方や課題の見つけ方など「ビジネス思考」のトレーニングに重点を置き、社会人として活躍できる能力を育む支援を行っています。

【詳細は決まり次第HPに掲載】

http://www.osaka-cu.ac.jp/ja/education/career_support/jobhunt/guide

就職支援室 TEL: 06-6605-2104
FAX: 06-6605-3031

世界で活躍! 市大OB 人物ファイル No.1

松井 みさきさん

写真家



写真提供:Yuko Kawasaki

自分の写真を通じて「希望」のメッセージを世界に発信していきたいです。ニューヨークで夢を追う、世界から集まるアーティストのポートレート・プロジェクト「New Yorkers with a Dream」を進めています。ニューヨークは様々なジャンルのアーティストと出逢える街なので、コラボレーションの機会にも恵まれやすく、現在、琴演奏家/作編曲家や、ダンサーの方々などと一緒に作品をつくっています。今後もコラボレーションを通じて、写真から映像へと活動の場の幅を広げていければと考えています。

市大生にひとこと!

何かやりたいことが見つかったときは、年齢や、それまでのバックグラウンド、また周囲の声にとらわれる必要はないと思います。成功する可能性が高い/低いとか、賛同してくれる人が多い/少ないとか、自信がある/ないとか、元々の才能がある/ないとか、そういうことではなく、「やろうという意志」、あとは「行動力」で可能性を切り開いていけるものだと思います。やりたいことが見つからない時は、「自分は何が嫌いか/苦手か」を考えれば、必ず「何が好きなか/得意なのか」が見えてくると思います。

1995年経済学部卒業後、日系の広告代理店に就職し、マーケティング・プランナーとして勤務。東京・大阪勤務を経て、外資系に転職、再び東京へ。2008年、写真家になるため渡米。現在、ニューヨーク在住。「no moment without hope(希望のない瞬間はない)」をテーマに、風景と人物写真を撮影。JICA横浜/海外移住資料館、在ニューヨーク日本国総領事館、マンハッタンとサンフランシスコのカルメート・ギャラリーなどにおいて、写真展を開催。2013年、2012年、International Photography Awardsの佳作を受賞。渡米してから毎日続けている、一日一枚の写真と、日本語と英語の一言のブログ「Cape of NY」は2013年に2,000回を越える。

ウェブサイト:www.misakimatsui.com 映像作品:www.vimeo.com/misakimatsui/whitesea

大阪市立大学医学部附属病院 先端予防医療部附属クリニック
メッドシティ
「MedCity21」がオープンします



平成26年4月14日(月)に全国で初めて公立大学法人として健診事業を行う施設である先端予防医療部附属クリニック「MedCity(メッドシティ)21」を「あべのハルカス」21階にオープンします。

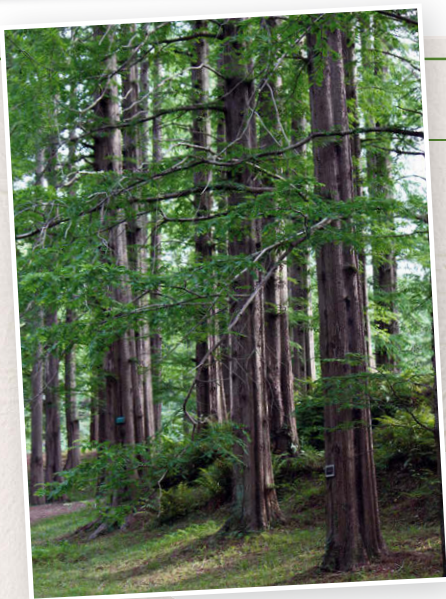
【事業内容】 人間ドックなどの健診、診療(レディースクリニック・専門外来)、健康相談等

月曜日～金曜日 8:30～17:00 土曜日 8:30～12:00 予約制

【人間ドック】 ●標準コース ●ライフスタイルコース ●がんコース ●エグゼクティブコース
 ●脳ドック ●肺ドック ●肝臓ドック ●心臓ドック

大学病院の持つ専門性の高い医療と人材を活かした健診・診療を行い、疾病の早期発見・早期治療を実践し、皆様の健康づくりに取り組んでいきます。また同時に健診データや生体試料(血液・尿等)の蓄積・解析により新たな診断方法や疾病の予防法を研究開発し先制医療の実現を目指します。

公立大学法人大阪市立大学 医学部附属病院
 先端予防医療部附属クリニック MedCity21
 〒545-6090 大阪市阿倍野区阿倍野筋1-1-43 あべのハルカス21階
 ■TEL:06-6624-4041(4月より開設) ■ホームページ: <http://www.medcity21.jp/>



大阪市立大学 **理学部附属植物園に行ってみよう!**

植物園は昭和25年に大阪市立大学工学部附属の研究施設として発足し、以来、植物学の基礎研究の対象として多くの植物の収集と保存に努めてきました。なかでも、日本産樹木の収集に力を注ぎ、野外で生育可能な約450種を植栽し、わが国の代表的な11種類の森の型(樹林型)を復元しています。この他にも学術的に重要な草本類や花木・外国産樹木などの収集・展示を行っています。近年、これらに加え今日的課題である絶滅危惧植物の保護育成にも積極的に取り組んでいます。

また、植物園は研究の場であるとともに、広く市民の皆さまの自然学習や生涯学習の場としてもご利用いただけるよう一般公開もしています。

公立大学法人大阪市立大学理学部附属植物園
 〒576-0004 大阪府交野市私市2000 TEL 072-891-2059 FAX 072-891-2101
 アクセス: 京阪交野線「私市(きさいち)」下車、徒歩約6分
 ホームページ: <http://www.sci.osaka-cu.ac.jp/biol/botan/>

大阪市立大学広報誌

CITY X UNIVERSITY
 Vol.14

発行: 公立大学法人 大阪市立大学
 企画・編集: 大学広報室(企画総務課広報担当)
 デザイン協力: desk
 発行日: 2014年3月

本誌に関するお問い合わせ・ご意見・ご感想は
 大阪市立大学 大学広報室
 〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
 tel:06-6605-3411 fax:06-6605-3572
 e-mail: t-koho@ado.osaka-cu.ac.jp
 本誌に掲載の写真および原稿の無断転用を禁じます

グローバルな都市研究・教育拠点



杉本キャンパス

商・経・法・文・理・工・生活科学 各学部・各大学院研究科・本部
 〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

阿倍野キャンパス

医学部・大学院医学研究科・大学院看護学研究科・医学部附属病院
 〒545-8585 大阪市阿倍野区旭町1-4-3

梅田サテライト

大学院創造都市研究科・文化交流センター
 〒530-0001 大阪市北区梅田1-2-2-600 大阪駅前第2ビル6階

<http://www.osaka-cu.ac.jp>